

「今一度、A 型の存在意義を考える」

今回の報酬改定や基準の見直しで、より実績が重視される傾向になり、全国で A 型を辞める事業所が多数あります。その中で、スコア点の実績には表れない良質な取り組みをしている事業所は、事業所継続の不安要素を抱えながら運営しています。

この機会に今一度、A 型の存在意義を考えつつ、差し迫った課題について考え、真に必要とされる A 型とは何かを考える機会としたいと思います。

2025年2月8日(土) 13:30～16:30

主催：全 A ネット、神奈川 A ネット、千葉 A ネット、東京 A ネット

後援：神奈川県、横浜市健康福祉局

会場：崎陽軒本社ビル 6 階 3 号室 (横浜市西区高島 2-13-12)

～スケジュール～

- 講演 1 「厚労省研究事業の実態調査中間報告」 関原深氏 (株式会社インサイト)
- 講演 2 「実践例から学ぶスコア方式～主に V. 地域連携活動及び VII. 利用者の知識・能力向上について～」 山内民興氏 (社会福祉法人ぷろぼの)
- パネルディスカッション「スコア方式の課題に対する取り組みと A 型の存在理由」
前田隆之氏 (NPO 法人このわ)・熊木正嗣氏 (株式会社グットライフ)
山内民興氏 (社会福祉法人ぷろぼの)・加藤裕二氏 (社会福祉法人オリーブの樹)

「厚労省研究事業の実態調査 (中間報告)」から 2011 年頃から A 型事業所が増えてきた歴史がある。社会福祉法人で取り組んできた就労系サービスを NPO や営利法人からの参入が始まってきた時期であるが、A 型は単独で A 型のみに取り組んでいる事業所が全体 73.0% と多数を占めている。多機能では B 型併設が 75.2% であるが、R 6 報酬改定による影響があると考えられる。対象利用者は B 型と異なり精神障害者が全体の 49.6% と約半数。利用時間は 4～5 時間が 45.2% と最も高い。生産活動の内容は清掃が最も多く、次にパソコン関連事業である。3 年間赤字であった事業所に対してスコアではマイナスの評価がされるように改定されたが、この改正によって 2 極化が進んだ。特に R 5 で 105 点評価の事業所は R 6 評価で 60 点に落ち込んだ事業所が 6.7% あることは特徴的である。

「実践例から学ぶスコア方式」での前提条件として就労支援事業は「福祉事業」であり、「就労準備支援」であるということ。経営では生産活動収支が赤字の事業所は R 5 に 50.7% であったものが 37.4% (R 6) にまで改善されたが、A 型の運営をするうえでは高収入の仕事内容 (質) であることと、安定した仕事の量が必要である。

パネルディスカッション「スコア方式の課題に対する取り組みとA型の存在理由」では、スコアの変更（R6改正）を考える前に、前提として、「なぜA型事業をやっているか」を考える機会になった。生産活動収支の評価が重視されるようになったが、そもそもA型も1企業として社会に必要とされる事業を行い、生産活動を通じて利用者（主には障害者）の働く職業性を高めることが目的でなくてはならない。

スコアを上げていく努力は必要であるが、スコアはあくまで事業のチェック機能であり、事業の必要性とは別のものと捉えA型事業所として自分たちは何を目指していくのか考えながら事業運営を行っていきたいと感じた。（全Aネット事務局 白井崇晃）



写真：パネルディスカッション（左から加藤氏・山内氏・熊木氏・前田氏）



写真：講演 山内民興氏（社会福祉法人ぶろぼの）